

オンライン作文交換活動「さくぶん.org」の実践報告

—教員は何を教えようとし、大学生は何を学んでいるか—

吉田 美登利

キーワード：作文教育 初年次教育 作文交換活動 さくぶん.org 大福帳

1. はじめに

1.1 研究のきっかけ

近年、大学では学生に国際的な感覚や外国語を身に付けさせようと教育のグローバル化に力を入れている。そのために学生を海外留学に送り出したり、授業を英語で行ったりなど様々な取り組みをしている。もちろん、海外経験や、英語をはじめとした外国語の学習は大切なことではあるが、それと同時に、日本の大学に留学している留学生との交流から学べることも多くあるように思う。日本人学生に尋ねてみると、日本で暮らす外国人と交流した経験のある大学生はそれほど多くないようである。今後、在日外国人の数は急増することが予想されるため、日本人大学生が社会に出てから仕事や生活をしていく上で、多様な背景を持つ外国人と日本語で自分の考えを的確に伝え、コミュニケーションする力を身に着けることは今後さらに重要になっていくのではないだろうか。

筆者は20数年間、留学生に日本語を教える仕事をしており、8年ほど前から日本人大学生に対してもレポートや作文の書き方を教えている。留学生と日本人学生の双方を教える立場として、彼らの相互交流の必要性を強く感じ、普段の授業でも日本人学生と留学生の交流する機会を持たせるようにしている。その活動の一つがオンラインの掲示板「さくぶん.org」を利用した作文交換活動である。

1.2 さくぶん.org

さくぶん.orgは、作文交換を通して心の交流をおこなう掲示板である。日本語教師の有志が運営しており、参加は申請すれば誰でも参加可能であるが、教員の呼びかけにより大学のクラス単位で参加している学生がほとんどである。参加者は、日本の大学で学ぶ日本人学生と留学生に加え、海外の大学で日本語を学ぶ学生も加わっている。海外学生の中には、その国へ勉強に来ている留学生もおり、第一外国語の英語に加え、第二外国語として日本語も学んでいるという学生もいる。掲示板には参加ルールとして「文章

を書いたり読んだりときは、自分の内側の声をよく聴いて丁寧言葉にすること」が示されている。作文投稿はペンネームで行われ、匿名性が守られている。

現在はオンライン上で行われている作文交換活動であるが、もともとは原稿用紙に書いたものを交換する形で行われてきた。1990年に日本人学生を対象に始まり、1996年からは留学生と日本人学生、留学生相互の交換も実施され、2000年からインターネットセッションが利用されるようになった。原稿用紙による交換活動と、インターネットセッションでは共に以下の5つの心理過程(1) 心理的出会いと自己変容の心理過程、(2) 自己の内面を表現し確認する心理過程、(3) 相互に相手を受け入れ理解する心理過程、(4) 書くことへの意欲、(5) 書くことへの自信、が引き起こされることが確認されている(得丸1998、2000a、2000b、2001)。

筆者担当の日本語表現の授業では、半期15回の様々な書く活動を通して、学生の文章表現力向上を目指している。半期のスケジュールを図1に示す。さくぶん.orgに関する活動については学期最初の2コマで投稿作文の下書きを行っている(図1の2コマ目、3コマ目に相当)。他大学との投稿スケジュールを調整したうえで、2回のさくぶん.orgの授業はコンピュータ室に移動し、オンライン上で作文やコメントの投稿を行っている(図1の4コマ目、8コマ目に相当)。本研究ではさくぶん.orgの作文交換活動はどのような効果をもたらしていると学生は感じているか。教員は何に意識して授業を行っているのかを明らかにする。

授業コマ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
内容	授業の進め方、など	作文課題1	コンピュータ室	作文課題2	作文課題3	コンピュータ室	作文課題3	作文課題4	作文課題4					レポートの書き方	

図1 半期のスケジュール 作文交換活動に関わる箇所はグレーで示した。

2. 授業設計

2.1 対象者と実施時期

本実践は、筆者が担当した関東地方の2大学3クラス(A大学28名×2クラス、B大学25名×1クラス)において行われた。初年次対象の文章表現クラスで母語話者を対象としたものであったがB大学にはN1レベルの留学生が2人在籍していた。授業実

(48)

施は 2017 年春学期であった^{注1}。

2.2 半期の授業の流れ

半期 15 コマで作文 4 編、レポート 1 編を書くことを通して、文章表現の力を身につけさせることを目標にしている。授業ではほぼ毎回、文章表現に関する講義を 10 分程度行うが、授業の大部分はグループ活動がメインとなっている。作文のテーマや書きたい内容、文章構成については多くの時間をかけグループで協議し、アウトラインを授業中に完成させたうえで、作文を書くことは宿題としている。海外大学のスケジュールに合わせ、ゴールデンウィーク前にオンライン上に作文投稿をしなければならないため、学期の最初に書く作文 1 編をさくぶん.org に投稿することとしている。

2.3 作文テーマ

2017 年度のさくぶん.org のテーマは「言葉づかいに悩むとき」であった^{注2}。このテーマはある参加大学の授業科目が言語関連であったことから、言葉に関するテーマがふさわしいということで設定されたものである。国内の日本人学生や留学生にとっても書きやすいテーマであったため、10 年ほど継続して使用されている。

2.4 さくぶん.org にかかわる教員の作業

2.4.1 作文原稿の準備

作文交換活動は先行研究で言及されているように自己開示と他者受容などの心理的な効果が大きな活動であるが、作文教育という視点での学習目標として、次の 3 つを設定した。1 つ目は、構想支援の課題としての役割、つまり提示された作文テーマから、より絞り込んだ内容の自分が書きたいテーマを設定する能力を身につけることである。「言葉づかいに悩むとき」というテーマは様々な切り口で書くことができるテーマであるため、構想支援法の一つである「マッピング」^{注3}の導入が行いやすい。10 分で 30～40 個の連想語を想起することを目標にマッピングを行い^{注4}、そこから選んだアイデアを使いアウトラインを作る練習を行った。

2 つ目は、オリジナリティーを出させることである。オンラインで 100 人超の作文が同じ掲示板に掲載されるため、内容が似たり寄ったりになってしまうとつまらなくなってしまう。初年次の学生に「言葉づかいに悩むとき」という作文テーマを示すと、多くの学生は高校時代の部活の先輩に対する言葉遣いや、アルバイトで使う敬語が難しい、などといったことをまず思い浮かべるようである。他の学生と内容が重ならず、個性的で生き生きとした文章を書けるようにするにはどうすればよいか考えさせた。

3 つ目は、読み手を意識させ、読み手に合わせた分かりやすい文章を書かせることである。参加者の中には日本語があまり上手ではない留学生もいること、また日本語が上

手だとしても海外在住の学生は日本事情などに詳しくない可能性があることなどを説明し、読み手を想像して分かりやすく書くことの大切さを伝えた。

特に2つ目のオリジナリティーを出すことと、3つ目の読み手を具体的に想定して書くことは、オンラインの作文交換だからこそ学生に意識させやすいと感じている。

2. 4. 2 コンピュータ室での作文投稿

さくぶん.org は、①作文投稿、②コメント投稿、③コメントに対する筆者の返信コメント、④掲示板参加コメント、の4つのセッションからなる。筆者のクラスでは、作文を下書きしておくことで、第1回のコンピュータ室の作業で①作文投稿1篇(600字～800字)と②3人の作文へのコメント投稿(400字程度)を一度に行い、第2回目には③筆者返信コメント(400字程度、返信コメント数はコメント数に応じて1～4名分程度)、④掲示板参加コメント(200字程度)を合わせて行った。学生のコンピュータ入力の手数は個人差があり、授業中に終わらなかった場合は宿題とした。

3. 分析1 質問紙調査—授業を通して鍛えられた知識・技能・能力—

3. 1 質問紙調査データ

さくぶん.orgの活動を含め、半期の授業を通して学生がどのような力を身に付けたと感じているかについて質問紙調査を行った。A大2クラス、B大1クラス(計3クラス)の学生を対象に授業の2回目(プレテスト)と最終回(ポストテスト)に74項目について調査を行った。調査協力者の人数はA大学がプレ47名、ポスト42名、B大学がプレ16名、ポスト22名であった。本研究で分析するのは、(1)コンピテンシー(授業を通して鍛えられた知識・技能)に関する20項目のみである。コンピテンシー20項目の内訳は、①一般的な教養、②分析力や問題解決能力、③専門分野や学科の知識、④批判的に考える能力、⑤異文化の人々に関する知識、⑥リーダーシップの能力、⑦人間関係を構築する能力、⑧他の人と協力して物事を遂行する能力、⑨異文化の人々と協力する能力、⑩地域社会が直面する問題を理解する能力、⑪国民が直面する問題を理解する能力、⑫文章表現の能力、⑬外国語の運用能力、⑭コミュニケーションの能力、⑮プレゼンテーションの能力、⑯数理的な能力、⑰コンピュータの操作能力、⑱時間を効果的に利用する能力、⑲グローバルな問題の理解、⑳卒業後に就職するための準備の程度、であった。各項目につき5段階で評価してもらい、3クラスの平均点を算出した。

3. 2 質問紙調査(コンピテンシー)の分析と考察

コンピテンシー(授業を通して鍛えられた「知識・技能」)の質問紙調査結果について表1と図2に示す。5段階評価のため、中央値を超える3.0点以上を高い評価だとした。

表1 授業を通して鍛えられた「知識・技能」

	①教養	②分析力	③学科知識	④批判思考	⑤異文化(知)	⑥リーダー	⑦人間関係	⑧協力遂行	⑨異文化(協)	⑩地域問題
ブレ	3.51	2.92	2.48	2.66	2.35	2.40	3.13	3.15	2.13	2.10
ポスト	3.61	3.63	2.83	3.80	3.66	2.75	3.81	3.70	2.83	2.95
伸び	0.10	0.71	0.35	1.14	1.30	0.35	0.68	0.56	0.70	0.86
	⑪国民問題	⑫文章表現	⑬外国語	⑭コミュ	⑮プレゼン	⑯数理	⑰PC	⑱時間管理	⑲Global	⑳就職準備
ブレ	2.07	3.53	1.50	3.42	2.48	1.53	1.81	2.68	2.11	2.36
ポスト	3.52	4.20	1.75	3.78	2.61	1.48	2.80	3.05	3.17	2.53
伸び	1.45	0.67	0.25	0.36	0.13	-0.05	0.99	0.37	1.06	0.17

※プレテストは第二回、ポストテストは最終回の授業で実施

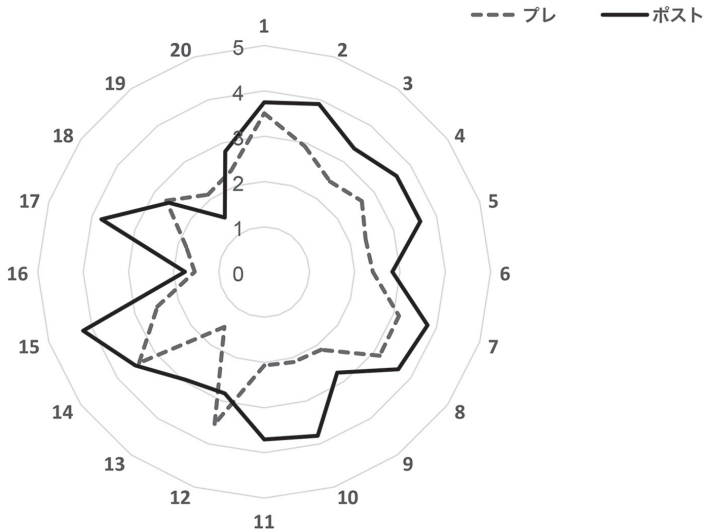


図2 授業を通して鍛えられた「知識・技能」

プレテストは第2回目の授業の最後に実施されたため、第1回、2回の授業についての評価といえる。3.0を超えた項目は、①一般的な教養(3.51)、⑦人間関係を構築する能力(3.13)、⑧他の人と協力して物事を遂行する能力(3.15)、⑫文章表現の能力(3.53)、⑭コミュニケーションの能力(3.42)、であった。この時期は導入として、基本的な文章表現技能や、人間関係を深めることを目的としたグループ活動を行っていたため、このような結果となったと考える。

ポストテストで、新たに3.0を上回った項目は、②分析力や問題解決能力(3.63)、④批判的に考える能力(3.80)、⑤異文化の人々に関する知識(3.66)、⑪国民が直面す

る問題を理解する能力 (3.52)、⑱時間を効果的に利用する能力 (3・05)、⑲グローバルな問題の理解 (3.17)、であった。プレテストで3.0を超えた5項目は、ポストテスト時には全ての項目で評価が高まっていた。

ポストテストで伸びた項目については、作文課題と授業形式が与えた可能性が考えられる。筆者は毎年の授業でその時に社会で話題になっていることを中心に、多少違うテーマを扱うものの、毎回次の3つ (1) ニセ科学・ニセ情報、メディアリテラシー、(2) 国内の社会問題、(3) 国際的な問題、をテーマとしている。作文テーマについてグループ学習を通して、批判的・多角的に考えることを中心に授業を進めているため、②や④の評価に影響を与えていると考えられる。授業の様々な活動の中で、特に「さくぶん.org」が与えた影響としては、作文を通じて日本語学習者と意見をやりとりしたことで⑤異文化の人々に関する知識、の項目の数値が伸びたと思われる。

4. 分析2 大福帳コメントの分析

4.1 大福帳データ

大福帳とは織田が開発したコメントシート的一种で、A4両面1枚に毎授業のコメントが3~4行程度、計15回(半期)分のコメントが書けるようになったシートである(織田1991)。筆者は毎授業の最後7, 8分程度で書かせており、学生は授業の感想や教師への質問などを自由に書き込んでいる。本研究では、コンピュータ室を利用したさくぶん.orgの授業の1回目(作文投稿とコメント)と、2回目(コメントへの返信と掲示板参加感想)の回に書かれた大福帳のコメントを分析する。分析は、大福帳分析調査に承諾した学生を分析対象とした。A大学22名、B大学21名、計41名であった。

4.2 大福帳分析方法

分析の基準は、得丸(2000b)で明らかになった作文交換活動における個人の心理過程の枠組みを使用する。得丸では作文交換活動における(1)全般的心理過程としてa.自己表現、b.自己理解、c.自己開示、d.自己受容、e.自己成長意欲、f.他者理解、g.相互受容、h.相互援助、i.「親密さ」の体験、(2)文章表現に関する心理過程としてj.文章表現能力の向上、k.文章表現活動に対する積極性、l.文章表現活動の日常への広がり、の12項目を挙げている。それぞれについてコメントシートの記述からどのような心理過程が進行しているか、また得丸(2000b)と同じ点や違う点があるのか比較を行う。

4.3 大福帳分析

本実践では得丸(2000b)で見られた12項目のうち、「c.自己開示」を除く11項目が

観察された。それぞれについて例を挙げてみていく。

4. 3. 1 全般的心理過程

a. 自己表現については「他人の考えを読み、意見を言うことは、自分の考えを文章にするより楽しかった」、「こういうことを思う人もいるのか!と思えたり自分の体験などから意見が言えた」という充実感や楽しさが感じられたというコメントがあった。

b. 自己理解については、「人のコメントを見るのは自分の足りないところを見つける良い機会になった」、「感想を書いているうちに、自分でも気づかなかった自分が思っていることに気づいた。思いに気づけて良かった」などが見られた。

d. 自己受容については「2人の人からのコメントで、方言に少し自信が持てるようになった気がする」、「今回の作文を通じて今まで悩んでいたことがすっきりした。言葉遣いは難しいけど、本当に勉強になることはいっぱいあるし、人との接し方も分かるようになった(留学生)」などのコメントが見られた。

e. 自己成長意欲については作文交換テーマに関するもの「改めて敬語の大切さが分かった。その場に応じて敬語を使うことを忘れずにいきたい」や、交流に関するもの「これからの授業でもっと色々な人と色々な意見をシェアしていきたい」があった。また授業内容に限らないもの「普段感想を言うときでも『すごい』という言葉を多用しすぎて全然頭では考えていなかったんだな、と気がついた。これからはもう少し深く考え、語彙力もつけていきたいなと思った」、「自分のコメントのコメントにしっかりとした作文と意見があり、参考にさせてもらうことが多々あった。自身の成長を改めて必要に感じた」が見られた。また、この自己成長意欲に関しては自分の未熟なところにまず言及し、その後で成長したいという流れの記述が多かった。例えば「自分が思ったようにコメントしてくれた人に伝わってない部分があり、改めて作文の難しさを感じた。留学生でも分かるように、はっきりと分かりやすい文が書けるようにもっと細かく説明しようと思った」、「他人のコメントを読むことで自分の考え方が他人に受け入れられていないことを知りました。どうやって説明したらいいのか、なぜわかってくれないのかをこれからも勉強しなければなりません(留学生)」などである。

f. 他者理解については、先行研究の得丸(1998)と同様に、記述量が最も多い項目であった。他者、特に外国人との考え方の違いに「違い」を知ったり、「共感」したり、何かを「改めて」感じたりしたという記述がみられた。例えば「地方の方の意見が面白かった。特に外国の方のは面白かった」、「人によって(作文の)話題が違うのが面白いと思った。作文にいろいろな(言葉についての)悩みがあって、それに対してどうしたのかが知れて面白かった」、「敬語を使うにはいろいろな価値観があり、人それぞれなんだなと改めて思った」、「共感できるものが多く、とてもコメントするのが楽しかったです。留学生の話などではそうなのか、と新たな発見もできた」などである。共感だけでなく、違いを知ったというようなコメント「他人の意見に多く触れ、共感できる部分と

『気にしすぎなのでは?』と思うところがあった。でもそういう感覚は大事に扱って無駄に否定しないで受け入れたい」も見られた。

g. 相互受容については、「たくさんの方の国の人の投稿を読んで様々な考えを知ることが出来た。中国語と日本語は違いました」、「外国人が参加しているので読んでいて日本との文化の違いが面白いと思った。文化の違いも素敵だなと思えるようになった」「自分の作文に共感してくれる人がいたのは嬉しかった」などのコメントが見られた。

h. 相互援助については、次のコメント「外国人の方に悩んでいたことのアドバイスをもらうことが出来て良かった」のみであった。今回の作文テーマでは違いを知り理解する心理過程は進んだが、相互援助が起こりにくいものであったのかもしれない。

i. 「親密さ」の体験については、交流が出来て楽しかった、嬉しかったのようなコメントが多く見られた。「コメントをもらうのは少し恥ずかしいような気もしたがとても良い経験になった」、「あまりコメントをもらえないだろうと思いながら org を久しぶりに開いたら、3人の方が書いてくれていて返信は大変でしたが、嬉しかったです」、「普段の作文はコメントをもらうことがあまりないので、楽しかった」などである。

4.3.2 文章表現に関する心理過程

ここまでは全般的な心理過程についてみてきたが、(2)では文章表現に関する心理過程についての記述を分析する。

j. 文章表現能力の向上については、「他人の作文を読むことで他人の考え方も分かり、さらに作文の書き方、構成など改めて考えられ良かった」の1つのみであった。文章表現技法については、授業内の講義などさくぶん.org以外にも学ぶ場が多いため、この活動は意見や心の交流が中心であると捉えられていたようである。加えて、1年間の活動を振り返っての所感を自由形式で文章化させたものを分析データとした得丸(2000b)と異なり、学期の途中であったため自身の成長を客観的に振り返るようなコメントが少なかつたと考えられる^{註5}。

k. 文章表現活動に対する積極性については、「この活動は新鮮でまた機会があれば参加したい」というコメントがいくつか見られた。ほかには「自分の書いた文章へのリアクションが世界中から返ってくる、この嬉しさに『文章を書く』ことの楽しさを思い出した」、「一生懸命書いた作文に対してコメントが来ていて嬉しかった。文章を書くのは苦手だけど頑張ろうと思えた」、「コメントを読むのも、もらったコメントを返すのも楽しかった。それとともにこれから作文をうまく書こうと思う指針になった」と楽しさ、嬉しさから書くことへの動機づけにつながったとのコメントが見られた。また、うまくできないから頑張りたいという記述「コメントのコメントの言葉が思い浮かばなくてとても大変でした。もっと鍛えてすらすら書けるようにしたい」も見られた。

l. 文章表現活動の日常への広がりとしては、「こんなにたくさん作文を書くことがないから(400字のコメントを3つ書いたことを指す)いつもよりもっと頭を使った気が

する。相手に読まれると思うときれいな日本語を使わなければならないと思うからいい練習になった。これからもたくさん書いていきたい」、「自分の中に文章のアイデアが全く出てこないのも、もっと様々な経験をしていきたいと思う」などが見られた。

4.3.3 その他

先行研究（得丸 2000b）の枠組みに含まれない心理過程として次の2つ「m. 他者配慮」「n. 異文化への驚き・新鮮さ」が見られた。また心理過程ではないが「o. コンピュータ入力」に関する記述も多く見られたため紹介する。

m. 他者配慮として、「人にコメントするのは思ったよりも難しかった」、「相手のことを考えなければならないので、コメントを書くことが難しい」、「自分と違う視点についての意見は面白かったが、自分には全くない経験を書いていた人もいたのでコメントが難しかった」、「人にどのように分からせるかか考えるのが大変だった」、「コメントが中国の方からだったので、少し返すのが難しかった」、「上手にコメントの返信できなかったから、少し申し訳ない気持ちがある」、「自分の意見を表す『作文』と違ってコメントはどうも自分の意見を一方的に押し付けているのではないかと思いました」など読み手のことを考えて最善を尽くして書いていても、うまく伝わっているのか心配になっているというような記述が見られた。

n. 異文化への驚き・新鮮さについて述べる。異文化についてのコメントは、他者理解に含められるもの「文化によって言葉遣いの考え方が全く違って面白かったです」だけでなく、もっと単純に異文化に触れた新鮮さや、驚きを感じられるような記述がみられた。これは外国人とほとんど交流の経験がない日本人学生特有のものであろう。例えば「外人の方が日本語専攻で、作文も書けるということに驚きうれしかった」、「海外の人も上手な日本語で様々な、時には日本人とは違った観点から日本語の言葉遣いに悩むときについて書いてすごいな、と思った」、「私はオーストラリアの人の作文を読んだがすごく共感出来て、日本人みたいですすごいなと思った」などである。

o. コンピュータ入力に関しては、心理過程には含まれないが、多くの学生が言及していたので記しておく。「作文を打つのに時間がかかり大変。もっと早く打てるように頑張りたい」、「タイピングが遅い、作文1つにこんなに時間がとられてしまうとレポートなどが進まないと思った」、「私はパソコンが苦手なので学べて良かった」、「作文を打ち込むのが遅く、あまり多くの作文を読めていない」など苦手意識や上達したいなどの意欲が書き込まれていた。一人だけ「手書きよりパソコンのほうが楽でいいです」とのコメントがあった。

4.4 大福帳コメントの考察

本研究では先行研究の得丸（2000b）とほぼ同様の心理過程が進んでいた一方で、得

丸でのみ見られた「c. 自己開示」、本研究で見られた次の2つ「m. 他者配慮、n. 異文化への驚き・新鮮さ」の心理過程があった。違いが見られた理由としては、①授業形態とデータのとり方の違い、②教師のビリーフの違いがあるように思われる。

第一のデータのとり方として、先行研究では採集時期が1年の授業の最後に行われた所感文であったことである。また作文交換も5セッション行われている。筆者の研究では作文交換は学期に1セッションしか行わず、大福帳にコメントを記載させたのは毎時間後であった^{注6}。第二の教師のビリーフの違いとしては得丸(1998)が作文交換活動は構成的エンカウンター^{注7}の手法を文章表現に応用したものと述べているが、筆者の授業と比較した場合、どちらかというとな筆者は作文技法に重きを置き、得丸氏は心理面の効果により意識を向ける指導を行っているように感じられる。また筆者のクラスで他者配慮や異文化に関する記述が多く見られたのは、筆者の授業中における次のような指示「中には作文が下手な外国人もいるけれど、ノンネイティブでここまで書けるのはすごいことだと思う。顔が見えない相手に伝わるように十分に配慮してコメントするように」などが学習者の作文交換活動に取り組む姿勢に影響を与えていた可能性が高いと考えられる。

5. 分析3 インタビューデータの分析

5.1 インタビューデータ

2017年春セッションでさくぶん.orgに参加したのは、国内外の4つの大学であった。担当教員4人のうち、関東地方在住のA先生と筆者とで、さくぶん.orgを授業でどのように利用方法について相互にインタビューを行った。普段はメールを利用して授業の打ち合わせを行っているため、対面で授業について話したのは筆者がこの活動に加わった2012年の打ち合わせ以来6年ぶりだった。本稿で分析対象とするのは、A先生が筆者へインタビューした1時間6分を文字化したものである。インタビュー実施時期は2018年9月であった。

5.2 インタビュー分析方法

インタビューで筆者が答えた内容は、筆者が本実践を行う際に①ははっきりと意識して行っていたこと、②(インタビューされるまでは)はっきりと自覚はなかったが自分の授業を特徴づけるもの、に分けられた。例えば、①としては「授業の進め方、さくぶん.orgのコースでの位置づけ、学生の参加意欲について筆者の印象、学生の授業に対する意見や感想」などがある。②としては「(A先生の学生と比較したうえで)筆者の担当クラスの学生の特性」などがある。インタビューを経験して初めて意識化できた事柄は、筆者とA先生との授業運営や教育観が多少異なっている箇所であり、筆者の授

業の特徴であるともいえる。次節ではインタビューを受けて初めて自覚した事柄のうち、筆者の授業の根幹であると考えられる2点を取り出して詳述する。

5.3 インタビューデータ分析結果と考察

インタビューを受けて初めて自覚した箇所として(1)学生に総合力を身につけさせようとする、(2)日本語教師の特性を母語話者への授業へも生かそうとする、の2つがあった。

5.3.1 学生に総合力を身につけさせようとする

筆者はインタビュー内で、学生に総合力を付けさせるという点について、何度か言及していた。例えば「私は留学生の科目を含め、どの授業でも様々な力を総合的につけさせたいと考えている」、「(書く力を伸ばすことと、総合的な力を伸ばすことのどちらがかという質問に対して)作文に現れるものは、その人自身の社会的な考えから切り離せない。(初年次の学生の多くは)、頭の中が高校生のままで、知的なレベルとか、思考を広くするとか深くするとか進めない限り、ライティング自体も上達しないな、と感じたので、思考力も同時に伸ばしたい」と答えている。

ここでいう総合力というのは、①作文やレポートを書く力、②わかりやすく自分の考えを口頭で伝える力、③仲間と楽しんだり協力したりできるコミュニケーション力、④多様性を知り、違いを受け入れたり楽しんだりできる異文化理解、⑤社会への関心や、メディアリテラシーも含めた論理的思考力、である。これらをモデル化したものを図3に示す。

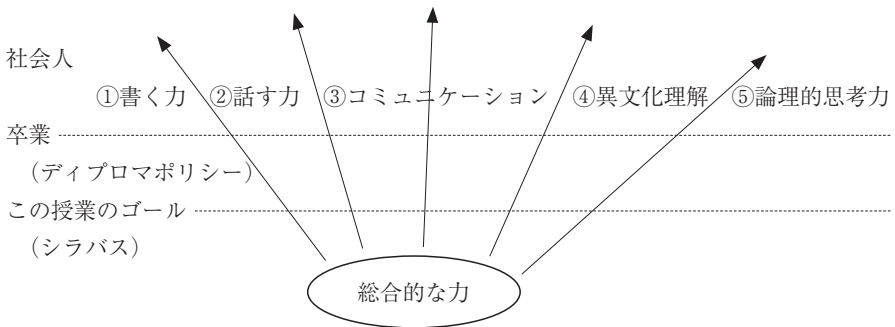


図3 筆者授業における「総合力」のモデル図

それぞれを伸ばすことを授業のゴールに置いているが、授業は半年しかないため、その先の大学卒業、社会に出てからもこの5点がさらに成長し、卒業後も学生の役に立つように、という認識を持って授業を行っていることに気がついた。これらの5点の関係

は独立したものではなく、それぞれが合わさって本人を形成しているものと考えている。例えば、⑤論理的思考力が①書く力に良い影響を及ぼしたり、④異文化理解が③コミュニケーションや、②話す力をさらに向上させ、学生がよりよく生きる助けとなったりするものと考えている。半期の目標（シラバス）の先には、大学のディプロマポリシーがあり、遠い目標としては、学生が社会人になった後の人生でも役に立つものであってほしいという願いを持っていることに気づいた。

5.3.2 日本語教師の特性を母語話者への授業へも生かそうと考える

日本語表現法は、筒井（2005：3-4）でも述べられているように、多くの大学で様々な専門の教員が担当している。筆者の所属する大学でも、元新聞記者や、文学専門の教員が担当することが多い。インタビューを通して、筆者が日本語教師であることの特性を授業に生かそうとしていることに気づいた。例えば、以下のようなコメントが見られた。「(なぜ外国人と作文交換するのか、という疑問は出ないかという質問に対して) 今後社会に出ると外国人との交流は進むので、外国人にも伝わる話し方や書き方が必須になる。そのような点を授業で強調しているので、自然に受け入れられる」、「作文テーマは毎回、国内の社会問題と世界の問題をテーマとして取り上げていて外国について必ず良く考えさせるようにしている」、「外国語としての日本語についての話を授業で取り上げるので、客観的に日本語について考える機会がある。そのせいか、日本人なのにあまり日本語ができません、というようなコメントも多い」、「(日本人学生は) 留学生よりも日本語の文法的なことは詳しくないため、日本語が難しいっていうのを授業で意識する」、「外国人に長く教えてきたので、日本人学生に異文化を伝えたい」などである。3の質問紙調査では、「異文化」に対する教育効果が大きかったが、教員のバックグラウンドも影響を与えていた可能性がある。

6. まとめと今後の課題

本研究で対象とした2017年度の前期授業では、学生が感じたさくぶん.orgの効果として、大福帳の記述からa.自己表現、b.自己理解、d.自己受容、e.自己成長意欲、f.他者理解、g.相互受容、h.相互援助、i.「親密さ」の体験、j.文章表現能力の向上、k.文章表現活動に対する積極性、l.文章表現活動の日常への広がり、m.他者配慮、n.異文化への驚き・新鮮さ、の心理過程が見られた。

質問紙による調査では、授業効果として、学生は次の項目について3クラス平均3.0以上の高評価を行っていた。2回目の授業最後に行ったプレテストでは、①一般的な教養(3.51)、⑦人間関係を構築する能力(3・13)、⑧他の人と協力して物事を遂行する能力(3.15)、⑫文章表現の能力(3.53)、⑭コミュニケーションの能力(3.42)、であった。15回目の授業最後に行ったポストテストで、新たに3.0を上回った項目は、②分

析力や問題解決能力 (3.63)、④批判的に考える能力 (3.80)、⑤異文化の人々に関する知識 (3.66)、⑪国民が直面する問題を理解する能力 (3.52)、⑱時間を効果的に利用する能力 (3・05)、⑲グローバルな問題の理解 (3.17)、であった。プレテストで3.0を超えた5項目は、ポストテスト時には全ての項目で評価が高まっていた。さくぶん.orgが特に大きな影響を与えた項目は、⑤異文化の人々に関する知識であったことが予想される。

筆者がさくぶん.orgの授業で学習者に身につけさせようとして意識していたこととして①構想支援の課題としての役割、②オリジナリティーを出させること、③読み手を意識させること、の3つがあった。加えてインタビューデータの分析により、④学生に総合力をつけさせようとする、⑤日本語教師の特性を母語話者の教育へも生かそうと考えている、ことが分かった。

今回の分析により本実践でも得丸(2000b他)の作文交換活動とはほぼ同様の心理効果が促進されることが明らかになった。ただし、得丸で見られたc.自己開示が見られず、m.他者配慮とp.異文化への驚き・新鮮さに関する記述が見られた。オンライン上の作文交換の際のルールやシステムに加え、教員同士の打ち合わせにより、どの教員の担当する授業でも、ある程度共通した内容の活動を行うことができる一方で、教員の個性や人となり、ビリーフの違いなどで、授業に違いが生まれてくるようである。本研究からは、筆者が学生に伝えた指示や課題(客観的に日本語をとらえること、読み手に配慮すること、異文化コミュニケーションの能力は今後さらに必要になること)などを学生が意識し、課題に取り組み、それが大福帳のコメントに現れていることが分かった。今後は、どのようなタイミングでどのような指示を出せば効果的に学習が進み、学習方略などが身につくか調べていきたいと考えている。

今回の分析では、同様のシラバスに基づいて授業を行っている3クラスを同時に分析したが、クラスの雰囲気や、メンバーにより、また大学ごとの雰囲気や学力の違いにより、グループ活動が活性化するか否かなど多少の違いがあったことも確かである。もちろん、同じ大学でも年度により雰囲気が違ったりする。クラスごとの違いについては紙幅の都合で言及できなかった。今後の課題としたい。様々なレベルや学生の特性に合った教授法はどんなものであるかについても、これから実践を通して考えて、改善を続けていきたい。

注

- 1 2017年度前期授業の詳しい内容については吉田(2017)でもさくぶん.org以外の活動に焦点を当てて実践報告を行っている。
- 2 2017年度のさくぶん.org以外の作文テーマは、①にせ科学・にせ情報(にせ健康食品、メディアリテラシー、震災デマ、など)、②保育園落ちた日本死ね(保

育園が増えない理由、シルバーポリティックス、匿名ブログが社会を変える、など) ③米大統領広島訪問(オバマ大統領スピーチ各紙の和訳の違い、米国教科書原爆記述、米国人の原爆投下への考えは年代・性別・人種により異なるという調査結果、など)を扱った。

- 3 マッピングとは記憶のメカニズムに基づいた構想法の一種で、キーワードから連想される語句を蜘蛛の巣状に広げて書き出していくことにより思考を活性化する発想法の一種である。教育現場では様々な科目で使われている。作文を書く際に何を書くかが思い浮かばない時や、テーマについてより絞った内容を書きたい時などに発想を広げる方法として特に有効な方法である。
- 4 様々な研究で、構想の際に連想語数が多い学習者ほど、作文の文字数や文節数が多く、評価もよい傾向があるとされている。(中野 1977、平山 2002、塚田 2005、吉田 2011 など) そのため筆者の授業では構想の力を鍛えるために、多くのキーワードを書く、という具体的な目標を立てて取り組ませている。
- 5 本研究と同じ授業を別の観点から分析した吉田(2017)では、大福帳への「成長実感(出来るようになった、前より苦ではなくなった)は最終回の授業に集中して見られている。
- 6 さくぶん.org 第1回目(作文投稿の回)では「他者理解」が、第2回(コメントもらったり書いたりする回)では「相互受容、相互援助」に関するコメントが多く見られた。
- 7 エンカウンター・グループとは、中島他(1999:73)によるとアメリカで生まれた自己成長をめざす集中的グループで「一般に7~20人程度の参加者とファシリテーターとよばれるリーダーで構成され、4,5日間の合宿形態をとる。ファシリテーターは、参加者の心理的安全を保証するとともに、彼らが『今、ここ』で率直に自己開示すること、自らを受容し他者からの受容に気づくこと、頭で考えることよりも体全体でその瞬間を感じることを促進する」としている。

参考文献

- 織田輝準(1991)「大福帳による授業改善の試み—大福帳効果の分析—」『三重大学教育学部研究紀要 教育学科』三重大学教育学部 42, 165-174
- 塚田泰彦(2005)『国語教室のマッピング 個人と共同の学びを支援する』教育出版
- 筒井洋一(2005)『言語表現ことはじめ』ひつじ書房
- 得丸智子(1998)「留学生と日本人学生による作文交換活動—構成的エンカウンター・グループを応用して—」『日本語教育』96号, 166-177
- 得丸智子(2000a)「留学生と日本人学生の作文交換活動における個人心理過程」『日本語教育』106号 47-55

(60)

得丸智子 (2000b) 「大学生を対象とした作文交換活動における個人過程の分析」『人間性心理学研究』18 卷 1 号、46-57

得丸智子 (2001) 「作文交換活動のインターネット利用の試み」『言語文化と日本語育』22 号 64-77

中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁栞算男・立花政夫・箱田裕司 (1999) 『心理学辞典』有斐閣

中野洋 (1977) 「作文ぎらいの分析」『現代作文講座 文章とは何か』明治書院

平山祐一郎 (2002) 『作文指導における言語連想法の効果—その心理学的分析—』風間書房

吉田美登利 (2011) 『日本語作文産出過程の分析と支援ツールの開発』風間書房

吉田美登利 (2017) 「大学初年次文章表現クラスにおけるアクティブ・ラーニングの実践報告」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』9 号、19-27

付記

(1) さくぶん.org の URL は次のとおりである (<http://sakubun.org/>)。学習者の作文については、パスワードを管理者から発行された場合のみ閲覧可となっている。

(2) 本研究の質問紙調査結果は、下記の研究成果によるものである。

科学研究費基盤研究 (B) 「学習成果に結実するアクティブラーニング型授業のプロセスと構造の実証的検討と理論化」(溝上慎一代表：課題番号 16H03075)